

「クリシェな探偵」

— 1 稿 —

2026/06/20

山極 瞭一朗

〈人物表〉

栗栖くりす ルシエル

(32)

探偵

玉木たまき 環たまき

(26)

刑事

堂本警部どうもとけいぶ

(54)

刑事

男1・2

女1・2

鑑識課員

激しい風が吹きつける。
荒れる波。

10人ほどの老若男女が集められている。その中に、
若手刑事の玉木環（26）、じれったそうに腕時計
を確認。

すると、こげ茶のマントにハットといういかにも探
偵然とした探偵の栗栖ルシエル（32）がやってく
る。火のついていないパイプを口に咥えている。

栗栖 「皆さん、お揃いですね」

環 「栗栖さん」

栗栖 「探偵は遅れてやってくる」

環、ダメだこりやとため息。

男1 「探偵さん、うちらの中にあいつを殺したやつがいるって
いうのかい？」

栗栖 「いなかったら呼びませんよ」

女1 「わざわざ関係ない私たちを呼ぶ必要あるのかしら？」

栗栖 「お決まりというやつです」

男1 「誰もあいつを恨ん——」

栗栖、手で制し、

栗栖 「極めて難しい事件でした」

男2 「さっさとやってくれよ。一体誰が殺したんだ」

環 「栗栖さん、巻きで」

栗栖、ムツとして環をチラ見、

栗栖 「仕方ありません、結論から申し上げます」

大袈裟にひとつ咳払いをして、

栗栖 「犯人はあなただ」

と、男2にピンと伸びた人差し指を向ける。

× × ×

男2がパトカーに連行される。

見送る栗栖は得意げな顔。パイプを咥える。

他の人々は三々五々散る。

2. 高速道路（夕）

渋滞中。1台の覆面パトカーがいる。

3. 車中（夕）

ハンドルを握る環。

後部座席の栗栖はじつと外の景色を眺めている。

環、ルームミラーで栗栖を見て、

環 「タイプ悪いと思います？」

栗栖、ひとつもピンと来ていない様子で、

栗栖 「タコパ？」

環、冷めた口調で、

環 「ツッコミ待ちですか？」

栗栖 「なんで？」

環 「全員を一か所に集める必要も、なんなら崖に集める必要もないですよ、絶対」

栗栖 「そこに崖があったからね」

環 「犯人だけ呼び出せばよくないですか？」

栗栖 「それじゃ探偵ぼくじゃないじゃん」

環 「ぼさいります？」

栗栖、身乗り出して、

栗栖 「愚門だよ、それ」

環 「はあ……」

栗栖 「淡々と解決しちゃったらね、それもう探偵じゃないから。タコなしでたこ焼きって言ってるようなもんだから。もはやたこ焼きじゃない」

環 「たこ焼き粉使ってる時点でぼさ担保されてるんで、イカ入れようがウィンナー入れようが、たこ焼きでなくなるわけではないです」

栗栖 「え、マウント取ってくる感じ？」

環 「最近ぼさ出すのに拍車かかってるんで、服装だけで十分ですよ」

渋滞が解消される。車が動き出す。

栗栖 「じゃあ言うけど、明石焼きはどうなわけ？ たこ焼き粉使うけど、明石焼きっていうよ。タコはどこいった？」

環 「あの、それ違いますから。明石焼きの影響受けてたこ焼きが生まれたんです。たこ焼きは明石焼きに含まれる。探偵なのに論点ズレまくり」

栗栖 「なっ」

すると、栗栖のスマホに着信。

栗栖は画面を環に見せ、

栗栖 「警部殿からだ。一旦この話は停戦だな」

環 「論破してるんで」

栗栖、無視して電話に出る。

栗栖 「はい、警部殿」

4. マンション近くの道（夜）

目の前には中層階建てのマンション。

周囲には規制線が張られ、野次馬たちの群れ。

その中に栗栖の姿。腕を組み、彼らを眺めている。

5. マンション・一室（夜）

散乱した室内。

胸を刺されて死んでいる中年男。

堂本警部（54）と環は遺体に合掌している。

堂本 「ルシエルは来てるよな？」

環、苦い顔で、

環 「警部が勝手に呼ぶので」

堂本 「なんだ、喧嘩したのか？」

環 「するほど仲良くありません」

堂本 「仲良くしろよ。ルシエルのおかげでどれだけ難事件を解

決できてるか」

環、愛想笑い。

すると、鑑識課員が堂本たちにキャラクター柄の小

銭入れを見せる。

鑑識課員 「あの、これ、ベッドの下に」

6. マンション近くの道（夜）

マンションから環が出てくる。栗栖を見つけると、

規制線をくぐって、

環 「ほんと警部と仲良いですね」

栗栖 「中には入れてくれないけどね」

栗栖と環は野次馬たちの輪から抜ける。

環 「さすがに部外者ではあるんで」

栗栖、ムツとして、

栗栖 「またマウント」

環 「ルール」

栗栖 「で、状況は？」

環 「これも嫌ですからね、私は」

栗栖 「警部の命令でしょ。ルール」

と、ニヤニヤ。

環、うざそうにため息。渋々スマホを出して、

環 「亡くなったのは住人の男性。争った形跡あり。致命傷は胸の刺し傷。その他擦過傷多数」

栗栖 「密室？」

環 「残念ながら」

栗栖 「なくんだ、残念」

環 「ちなみに、独り暮らしの男性に似つかわしくないものが」
画面を見せる。キャラクター柄の小銭入れの画像。

栗栖 「可愛いものの好きの男性じゃないの？」

環 「少年漫画ばかりです」

栗栖 「犯人の遺留物ってわけね」

環 「そのセンが高いかと」

栗栖、ピタッと立ち止まる。

環 「どうしました？」

栗栖、腕を組み、そして人差し指をピンと立てる。

栗栖 「こっち」

と、角を曲がる。

環、慌ててついていく。

7.

マンションの裏口付近の道（深夜）

栗栖と環、柱の陰から裏口を窺っている。

環 「意味ありますか？」

栗栖 「犯人は現場に戻る」

環 「いやそこまでバカじゃないでしょ」

栗栖 「あのね、バカとかそういう問題じゃない」

環 「どうせ探偵っぽい張り込みとかしたいだけでしょ」

栗栖 「心外だな」

と、どこか楽しそう。

栗栖 「小銭入れは犯人のものの可能性が高いわけでしょ。となると放置するわけにはいかないじゃん。回収しようって発想になると思うけど」

環 「いやいや、回収したら捕まるだけです。警察うじやうじやいるんですよ。バカ以外のなにものでもない」

栗栖 「バカって言う方がよっぽどバカだよ」

環 「小学生かよ」

栗栖 「それだけ愛着あるかもしれないじゃん？」

環 「だったら置いていかねえよ」

栗栖、パイプを咥えてじっと裏口を見つめる。

8.

マンションの裏口付近の道（朝）

朝日が差す。

どこかでカラスが鳴いている。

栗栖、腕を組み、裏口を見つめている。

ウトウトしている環は柱に頭をぶつける。ハツとして、目をシュパシュパ。

栗栖 「刑事の風上にも置けないね」

環 「……ああ、すいません」

栗栖 「犯人、来ないって思ってるでしょ」

環 「いや、別に……」

栗栖 「身体は正直だからね」

環、やっちゃまったと苦い顔。

栗栖、得意げにパイプを咥える。

すると、周囲を警戒しながら、若い女2が来る。

栗栖、女2に気付कि、

栗栖 「はい、ビンゴ」

環 「嘘、マジ？」

女2は裏口からマンションに侵入。

栗栖 「不法侵入だよ。環ちゃん、確保」

環、両頬を叩き、駆け出す。

女2は環に気付くと、咄嗟に逃げ出す。

環 「あ、ちょ……」

栗栖 「クロだな」

環、女2を掴み、背負い投げ。

栗栖、拍手。

環 「どうして逃げたの？」

女2は観念したようで、

女2 「わ、私が殺りました」

栗栖、颯爽と登場。女2を見下ろして、

栗栖 「犯人は現場に戻る」

環 「偶然でしょ」

女2 「……どうしてわかったの？」

栗栖 「結局さ、人ってわかっていてもありがちな行動をしてしまうんだよ」

栗栖、大袈裟に咳払い。女2に人差し指を向けて、

栗栖 「犯人はあなただ」

環 「告白してんじゃん」

栗栖、満足そうに、にっこりと笑う。

(終わり)